



各レベルで楽しめる ヒストリックカー・ラリー

text & photo: Hiroyuki Kondou (近藤浩之)



今回のイベントの基点となったホテルシーパレスリゾートのエントランスからスタートする、1968年式ダットサン・フェアレディ2000。



英国車が多いのがこのイベントの特徴でもあるが、トヨタ2000GTなど日本車も多数参加。ちなみに奥の2000GTは左ハンドルだ。



フェラーリ勢はレーシーにモディファイされたディーノ246gtのほか、2台のディーノとF355がやってきた。



100数十キロを走り1日目のゴールを迎える、1947年式ジャガー XK120 DHC。その後は、1973年式のモーガン4/4。



年 2回のペースで開催されている、ヒストリックカー・ミーティング。意外にコマ図を使用する本格的なタイム・ラリー・イベントが少ない愛知において、「その面白さを知ってもらうためと、イベントを通してクルマ好きの仲間を増やしてもらいたい」という想いから始まったこのイベント。毎回、基点となる場所とコースを変えているのもポイントで、5回目となった今回は、豊橋のホテル・シーパレスリゾートを基点とする「ヒストリックカー・ミーティングin豊橋」と銘打たれ、5月12～13日の2日間に渡り参加者はコマ図を頼りに新たなルートに挑んだ。

ヒストリックカー・ミーティングの参加車両は1980年までに製造されたヒストリック・モデルとスペシャルティカーとなっており、英国車の参加が多いのも特徴といえるだろう。今回はゲスト車両として、4台ものモーガンのスリーホイラーが参加するなど、参加車両も華やかなものとなっていた。

2日間共に、豊橋を中心に浜名湖やラグーナ蒲郡、蔵王山など近隣の名所やワインディング、シーサイドロードを満喫できるそれぞれのコースが設定されていたが、走行距離は両日とも100数十kmとソフトなもの。初心者も大歓迎という(実際、初心者の参加も多い)。肩肘張らずに、マシンにも優しいというのも、ヒストリックカー・ミーティングの特徴のひとつ。とはいえベテランは、コマ図を基に綿密なスケジュールを設定するなど、真剣そのもの。コース設定はソフトでも、結果を残すためには真剣さが要求される。参加者がそれぞれのレベルで楽しめるのも、このイベントの魅力のひとつ。また夜のウェルカムパーティもカジュアルな雰囲気、参加者はくつろいでその日の出来事や、クルマ談義に花を咲かせていたのも印象に残った。

沿道で参加車両に手を振る地元の方、ベストポイントでカメラを構える愛好家、市役所でのスタンプポイントとゴールで和太鼓を奏でてくれた「しおかぜ太鼓」のメンバー、イベントの華を添える「ミスみなと」の女性達。参加者だけでなく、地域を巻き込んだヒストリックカー・ミーティングは、5回目にしてすでに馴染んでいるようだ。実際、今回取材班はオフィシャルのゼッケンを貼ったクルマで撮影ポイントを回ったのだが、地元の方々にスケジュールを訪ねられることも多かった。

次回のヒストリックカー・ミーティングは、今年の12月1～2日に伊勢志摩で開催が予定されている。東海地方に根付いたイベントとなっているヒストリックカー・ミーティングは、県外からの参加も歓迎で、さらに女性エントラントも大歓迎だという。

また半年後、様々なヒストリックカーが走り、新たなクルマ好きの出会いがあることだろう。④

- ① 1952 MG TDに乗るのはこのイベントのベテランであり、何度も優勝を手に入れているオーナー。最終日ゴールのヒトコマ。
- ② 2日間のイベントを通して、ゲスト車両として4台のモーガン・スーパースポーツ(3ホイラー)が先導車を務めた。③ ちょっと珍しい存在であるマセラティ・カムシンが参加。個性的なスタイリングはギャラリーの注目を集めていた。